

# 「観察文」の定義をめぐって ——クワインの言語論と認識論

清 塚 邦 彦

(人間文化学科 哲学)

本稿<sup>(1)</sup>では、クワインが最晩年に至るまで苦慮し続けた問題の一つとして、観察文の定義の問題を取り上げる。本稿の基本的な視点は、クワインの苦慮の背景が、観察文理論を取り巻く文脈の二重性にあるとするものである。一つは認識論の文脈であり、もう一つは言語論の文脈である。ここで認識論とは、伝統的な経験主義の立場を自然科学的な仮説の一つとして捉え直すいわゆる「自然化された認識論」の立場を指し、言語論とは、言語の公共性に力点をおく行動主義的な言語観を指す。はたしてこの二つはうまく調和していたのか。この点については別稿(清塚 [2000])でも基本的な問題の構図を論じたが、本稿の課題は、「観察文」の概念に関するクワインの特徴づけを仔細に辿ることで、この問題をめぐるクワインの思索の経緯と帰趨とをより明確にすることにある。

## 1. 「観察文」理論の背景と問題点

クワインが認識論上の立場として終始「経験主義」を標榜していたことはよく知られているが、「経験主義」の内実をどう理解するかに関しては、1950年代の初頭あたりを境に、大きな変化が見られる。それは、大まかに括れば、現象主義から物理主義への移行ということになる。ただしこれは、この時期以前のクワインが現象主義の立場を取っていたということではない。むしろ、現象主義か物理主義かという認識論上の見解の是非を問う際のクワインの枠組み自体が、この時期以前には現象主義の影響を色濃く帯びていたということである。たとえば論文「なにがあるのかについて」(1948年)や「経験主義のふたつのドグマ」(1951年)では、「なまの経験の無秩序な断片」<sup>(2)</sup>や「経験の流れ」<sup>(3)</sup>といった現象主義を思わせる言い回しが無批判に使用され、現象主義と物理主義の違いはそこにどのような概念枠をあてがうかの違いとして理解されている。しかし、論文「心的存在者について」(1952年)以後の著作では、認識論をめぐる議論からその種の現象主義的な概念が一掃される。そこでは、主観的な経験への言及が物理的な事物への言及なしには成り立たないことが強調され、経験をいかなる概念化にも先立つ自律的な存在領域であるとする想定への批判が明確になる<sup>(4)</sup>。それに伴い、

クワインの経験主義理解にも二つの大きな変化が生じる。一つは、経験主義の立場を定式化する際に、「経験」ではなく物理的な刺激が問題とされるようになることである（たとえば、「外部世界を知る際に頼りになるのは体表の刺激だけだ」（Quine [1954], p.230）というふう）。また第二に、体表刺激についての知見が経験的知識の一例であることを踏まえて、クワインは経験主義を、認識論研究の指針となるそれ自身が経験的な仮説として捉え直す。そこから帰結するのが、認識論の主題を体表刺激と科学理論の関係に求めた上で、その関係を手持ちの科学的知見を踏まえて解明するのが認識論の課題であるとする「自然化された認識論」<sup>(6)</sup>のプログラムである。

「観察文」の概念はこの自然化された認識論の重要な要素として位置づけられる。それは何より、物理的な刺激と科学理論の関係をとりもつ中間項としてである。クワインはよく、経験主義の物理主義的な捉え直しを踏まえて、物理的な刺激それ自体が科学の証拠であるかのような言い方をする<sup>(6)</sup>が、厳密に言えば、物理的な刺激は、理論に対して論理的な関係を持ちうる存在ではない。それゆえ、物理的な刺激が理論に加える制約を明らかにするには、理論と論理的な関係を持ちうるものの領域の内部に、物理的な刺激と緊密なつながりを持ち、そのことによって理論に対して物理的刺激的の代弁者として振る舞う存在を見定めておく必要がある。それがクワインの認識論における「観察文」の役割である<sup>(7)</sup>。

しかし、それでは観察文とは具体的にはどのような文なのか。それを明確化する段階でクワインが援用するのが、言語の公共性を旨とする行動主義的な言語観である。これは、言語理解を、言語表現と結びついた心的あるいは抽象的な存在者（意味それ自体）の把握として説明するような言語論へのアンチテーゼであり、後年の要約では、「言語的意味のうちには、観察可能な状況における公然の行動から得られる以上のものは何も含まれていない」<sup>(8)</sup>とする立場である。それは『ことばと対象』では次のような形で表明されている。

「言語習得の際には、我々はいつ何を言うべきかに関して、誰もが利用しうる手がかりに全面的に頼らなければならない。それゆえ、言語的な意味についての正しい分析は、社会的に観察可能な刺激過程への公然的な反応の傾性に基づくものでなければならない」（Quine [1960], p.ix [邦訳, v 頁。]）。

「言語の学習は、誰の目にも明らかであるような状況での発語という観察可能な他人の行為を通して行われる」（*ibid.*, p.1 [邦訳, 1頁。]）。

クワインはこの種の言語観を踏まえて、言語理解についての説明の中から、言語使用者が観察によって確認できる以外の要素を一切排除する。そのことは、具体的には、「社会的に観察可能な刺激過程」と言語行動の相関関係に着目する行動主義的な考察という形を取った。そして、その種の考察の拠り所となるのが、《一定の物理的な刺激を与えた上で、ある文を提示して同意・不同意を確認する》という質問手続きである。

観察文の範囲は、この質問手続きを踏まえた二種類の分類を通して限定される。一つの分類は、この質問手続きの際に、提示された物理的な刺激と得られる応答の間に明確な相関関係があるかどうかを基準とする。そのような相関関係のある文(たとえば「赤い」「ウサギだ」)は「場面文」、そうでない文(たとえば「 $2 + 2 = 4$ 」)は「持続文」と呼ばれる。ついで、こんどは「場面文」の内部で、文への同意を促す物理的な刺激の内訳がどの程度一様であるか、という観点からもう一つの分類が行われる。クワインの考えでは、「赤い」や「ウサギだ」の場合には、程度の差はあれ、文への同意を促す物理的刺激はどの場合でも(また誰の場合でも)おおむね一様であるのに対して、「独身男性だ」のような文の場合には、文への同意が当面の物理的刺激以外の要素(「二次的情報」)に大きく依存し、しかもその二次的情報の内訳は人ごとに(また場面ごとに)多様である。前者の部類の場面文は、それに対する同意を促す一定範囲の物理的刺激(「刺激意味」と緊密な因果的つながりを持っている。クワインが「観察文」と呼ぶのはこの部類の場面文である。

クワインが言語を論ずる際にこの種の文に着目するのは、この種の文こそ、その意味内容(何と関わっているか)が経験的に確認可能な文に他ならないからである。未知の言語を翻訳する際に我々がまず着目すべきなのは観察文への現地人の同意・不同意の傾向性であり、それこそが、翻訳のための唯一の経験的基盤を形成するのである。

と同時に、観察文に対する同意・不同意の傾向性は、先述のように、認識論においては、我々の知識体系全体に対する経験的な制約(「科学のデータ文」<sup>(9)</sup>)をなすものである。そして、なぜ観察文がそのような認識論上の特権を持つかについての理由の説明もまた、次のように、上記の質問手続きに際しての判定の一致という事実求められる。

「観察文とは、観察者が適当な位置にいるならばその判定がきわめて確実にぴったり一致するような場面文にほかならない。したがって観察文は、科学者が彼の説を信じかねている同僚に苦しめられた時に、とかく拠り所とする文にほかならない」<sup>(10)</sup>。

この説明で特徴的なのは、観察文が真あるいは確実であることについての保証の代りに、たんに判定の一致という事実が持ち出される点である。それは知識に関する整合説を示唆する。もちろん、この場合の整合説には、「観察者が適当な位置にいるならば」という言い方で物理的な刺激との因果的な近接性という条件が織り込まれている。その点を踏まえて言い直せば、上の説明の要点は、観察文の場合には、一定の物理的な刺激との間の因果的な近接性が社会的に共有されているがために、判定が誰の場合にも一致し、そのゆえに、見解の対立が生じた場合の議論の共通の土俵として機能する、ということになる<sup>(11)</sup>。

以上のように、クワインは行動主義的な言語観を援用することで観察文の範囲を限定し、かつ、それが理論に対して「データ文」として振る舞う理由を説明した。しかし、観察文についてのこのような特徴づけは、クワインの自然化された認識論の中で期待されている役割

と、うまく一致するのだろうか。以下で問題にしたいのはその点である。細かい経緯は次節以後に譲ることにして、ここでは基本的な問題点をあらかじめ簡単に指摘しておきたい。それは、ひとことで言えば、言語活動を見る際の視点の違いである。自然化された認識論からすれば、一定の物理的な刺激に際して我々が一定の文に同意を示すという事実は、徹底した第三人称の視点から考察される。そこでは、この種の事実が自然現象の一種として位置づけられ、科学的な説明の対象と見なされる。他方、行動主義的な言語観は、「誰の目にも明らかであるような状況」に定位するというその基本姿勢からして、言語活動の説明に際して、純然たる第三人称の視点を貫くことはできない。そこには、言語理解の説明の拠り所を「誰の目にも明らか（conspicuously intersubjective）であるような状況」に限定するという形で、被験者の視点が織り込まれているからである。

このような視点の違いは、物理的な刺激と観察文のつながりを考える際に、微妙な纏れを生じさせる。それは観察文の定義に即して言えば、観察文と対応づけられるべき物理的刺激の内訳をどう考えるかという問題と連動している<sup>(12)</sup>。その点について明確な指摘を行い、議論の焦点として浮かび上がらせたのは、D・デイヴィドソンの論文「真理と意味と証拠」(Davidson [1990]) である。デイヴィドソンは対立の構図を明確化するために、「近位説」と「遠位説」という二つの立場を区別する<sup>(13)</sup>。「近位説 (proximal theory)」と呼ばれるのは、観察文と対応づけられる物理的な刺激（『ことばと対象』の用語では「刺激過程 (stimulation)」）を、体表の感覚受容器の触発という生理学的な事実と解するものである。他方、「遠位説 (distal theory)」と呼ばれるのは、観察文と対応づけられる「刺激過程」を、誰もが観察しうる対象や出来事、と考えるものである（具体的には、たとえば「ウサギだ」の場合ならば、ウサギ、あるいは目の前をウサギが駆け抜けるといった出来事がそれに当たる）。言うまでもなく、近位説の背景にあるのは、観察文を体表刺激と科学理論の仲介者として位置づける自然化された経験主義の立場であり、遠位説の背後には、言語の公共性を踏まえた行動主義的な言語観がある。デイヴィドソンは、クワインが基本的には近位説を取りながら、その著作には二つの考え方が混在していることを指摘した上で、近位説を放棄して遠位説を取るべきことを提案した。デイヴィドソンからすれば、文と対応づけられるべきなのは観察可能な対象や出来事であって、感覚受容器の触発ではない。これは、本稿での言い方に即せば、自然化された経験主義を退け、行動主義の観点を徹底させる提案として位置づけることができる。もちろん、デイヴィドソンも、感覚受容器の触発と、文への同意傾性の間の因果的なつながりを否定するわけではない。たしかに因果関係はある。しかし、その解明は、「現在では哲学とは随分かけ離れたものとなっている科学の段階」(Davidson [1999], p.84.) に属するというのがデイヴィドソンの位置付けである。

こうしたデイヴィドソンの提案についてはすでに別稿で論じたことがある（清塚 [2002]）。

以下で行いたいのはむしろ、クワインが一連の著作の中で取っていた立場が正確にはいかなるものであったかの確認である。以下ではその点を、便宜的な時期区分にしたがって見ていく。最初に問題になるのは、クワインが初めて観察文の理論を提示した『ことばと対象』(1960年)での立場である。デイヴィッドソン以来の通説(それはクワイン自身が回顧的な文章の中で追認しているところでもある)に従えば、そこでのクワインの立場は基本的には「近位説」である。しかし、本稿の第2節では、クワインのテキストはもう少し微妙であることを確認しておきたい。第二の段階は、クワインが『ことばと対象』での立場への疑念をみずから表明した1965年の講演「命題的对象」以後、70年代の末に至る時期である。この時期のクワインの著作に顕著なのは、「遠位説」への傾きである。それがどのような事情に由来し、どのような問題を孕んでいたかという点が第3節の検討課題である。第三の段階は、クワインが「近位説」の立場を鮮明にし始める1981年の論文「経験的内容」以後、1990年代の中頃までの時期である。その時期の立場がどこまで厳密に「近位説」と言えるのかという点が第4節の問題になる。最後に、『刺激から科学へ』が出版された1995年以後、没年に至るまでの時期を第四期としておきたい。クワインはこの時期、ライブニッツから借用した「予定調和」という言い方を愛用するようになる。それが「近位説」をめぐる議論にとってどのような意義を持っていたか。それが第5節の検討課題になる。

## 2. 『ことばと対象』(1960年)の立場

クワインは後年の著作で、『ことばと対象』における「観察文」の理論を、デイヴィッドソンの用語を借りれば、「近位説」として回顧している。たとえば論文「二つの前線での進歩」(1996年)には次のような回顧の言葉がある。

「正しい翻訳は意味を維持するのだと言われてきた。『ことばと対象』では、心理主義と意味を嫌って、観察文の正しい翻訳を、私の言う*刺激意味*を維持するものとして説明した。観察文の刺激意味とは、被験者に当の文への同意を促す一定範囲の刺激過程のことだ、と私は説明した。そして、その範囲に属する各々の刺激過程は、私の意味では、被験者の神経受容器の何らかの部分集合のほぼ同時的な発火のことだった。

私は翻訳者が神経生理学に従事していると言いたかったのではない。翻訳者はただ、現地人の観察文の翻訳を当たり前のやり方で推測しているだけである。つまり、みずからが現地人の立場に置かれた様子を思い描いて、自分ならばそこでどんな英文の発話を促されるかを考察しているのである。最終的に、翻訳者は、観察文の翻訳から、私の言う*分析仮説*を用いて、理論文の翻訳を構築するが、その際にも神経末端は問題にされない。刺激意味と分析仮説はむしろ私の職務に属する。つまり、翻訳者の活動に関する私

の理論に。刺激意味は、観察文の正しい翻訳が、理論的に見て、維持するところのものだった」（Quine [1996], p.159. 斜体は原文に従う）。

この論述のポイントとして二点を確認しておきたい。一つは、『ことばと対象』で言われる「刺激過程」が、「被験者の神経受容器の何らかの部分集合のほぼ同時的な発火」を意味していたこと、つまり「近位説」が取られていたことが、本人の口から確認されていることである。また、もう一つは、『ことばと対象』で言われる「刺激過程」が、被験者や言語学者の関知する所ではないとされている点である。「刺激過程」は、この説明では、話し手が観察文を発話する際に実際に知覚している対象ではなく、また、言語学者が翻訳を行う時に知覚し、発話と対応づける対象でもなく、たんに、発話やその翻訳作業を記述する理論家としてのクワインが、発話を刺激過程と対応づけているだけだというのである。

どちらの論点も、著者本人による問題把握の確認としては貴重だが、『ことばと対象』の文面を見る限り、必ずしも正確ではない。『ことばと対象』では、観察文の概念と関連する叙述の中に、後年の著作に頻出する「感覚受容器」「神経末端」への言及が見られないからである。『ことばと対象』に見られる「刺激過程」についての唯一の説明は、視覚に限定した次のような説明である。

「視覚的な刺激過程は、当面の目的のためには、目に当たる有色光線のパターン (pattern of chromatic irradiation of the eye) と同一視しておくのがいちばんだろう」（Quine [1960], p.31. [邦訳48頁]）。

ここに挙がっている「目に当たる有色光線のパターン」は、厳密には、後年の回顧にある「感覚受容器の触発」ではなく、その一步手前の段階に相当する<sup>(14)</sup>。原理的には、目に同じパターンの有色光線が当たっても、結果として生じる受容器の触発パターンは一定とは限らず、逆に、目に当たる光線が変わっても、受容器が同じ仕方で触発されることもありうる。

もちろん、これは微細な区別であるから、クワインの回顧がまったく不正確というわけではない。表向きは「目に当たる有色光線のパターン」と言いながら、クワインの主たる関心はそこからほぼ間違いなく結果する「受容器の触発」にあったとも考えられる。実際、『ことばと対象』にはそのような関心の所在を推測させる示唆的な一節がある。

「『ガヴァガイ?』への同意を原地人に促すのは、ウサギではなく刺激過程だと考えることが重要である。ウサギを模造品とすりかえても刺激過程は同一でありうる。逆に、ウサギに変化がなくとも、視角や照明や色のコントラストが変われば、刺激過程が『ガヴァガイ?』への同意を促す力は変化しうる。『ガヴァガイ』と『ウサギだ』の使用を試験的に同等視する時、照合されるべきものは刺激過程であって動物ではない」(Quine[1960], p.31. [邦訳47-48頁])。

この発言から窺われるのは、「刺激過程」をめぐるクワインの考察が、直接には翻訳を主題と

した言語論の文脈に位置していながら、人間の認識活動の物理的な《端緒》の特定という自然化された認識論の関心に強く動機づけられていることである。素朴に考えれば、正確な特定が困難な「刺激過程」(光線のパタン)の異同より、ウサギと模造品の異同の方がはるかに確認が簡単である。にもかかわらずここで「刺激過程」が優先されるのはなぜか。おそらくそれは、《ウサギを見る場合も模造品を見る場合も、我々の認識活動の出発点は体表で起こる刺激過程であるはずだ》という配慮が働いているためである。しかし、その種の認識論的配慮からすれば、「刺激過程」と呼ぶのに相応しいのは、「目に当たる有色光線のパタン」であるより、目に光線が当たった結果生じる神経末端の状態(感覚受容器の触発パタン)だと言うべきである。すでに述べたように、目に当たる光線のパタンは、感覚受容器の触発パタンとは一致しない場合がありうるが、後続する認識過程に影響を及ぼすのは、目に当たる光線のパタンよりも、感覚受容器の触発パタンだからである。

しかし、では『ことばと対象』のクワインはなぜ感覚受容器の触発ではなく、その一步手前で踏み留まったのか。その理由は、『ことばと対象』でも繰り返し強調されている言語の公共性という考え方にある。それに従えば、根本的翻訳を行う言語学者を含めて、すべての言語習得の拠り所となるのは、誰もが観察しうる対象や出来事でなければならない。そして、「刺激過程」に関する先ほどの説明がこの《誰もが観察しうること (intersubjective observability)》を配慮したものであることは、すぐ後に続く次の説明から明らかである。

「被験者の頭の奥深くを覗き込むことは、たとえ可能だとしても適切ではないだろう。なぜなら、我々はその人特有の神経伝達系や、習慣形成の個人史とは、関わりたくないからである。我々が求めているのは、社会的に教え込まれた被験者の言語用法であり、したがって、社会的なチェックに服するのが通例であるような条件(conditions normally subject to social assessment)に対する被験者の反応である……。目に当たる光線については、社会によっても言語学者によっても、現にある程度まで間主観的なチェックが行われている。それは被験者の体の向きや、対象の相対的配置を考慮に入れることで行われるのである」(Quine [1960], p.31. [邦訳48頁])。

先の「目に当たる有色光線のパタン」が、ここに言われる「社会的なチェックに服するのが通例であるような条件」に当たると見なされていることは明らかである。目に当たる光線の正確なパタンをその都度特定することは被験者にも言語学者にも期待しがたいが、その概略ならば、「被験者の体の向きや、対象の相対的配置」の観察から大まかな確認は可能である。「被験者の体の向きや、対象の相対的配置」を観察することは、間接的には、「目に当たる有色光線のパタン」を、つまりは「刺激過程」を観察することに他ならない。

以上の考察が正しければ、クワインが『ことばと対象』の随所で、「刺激過程」と言うべき時にたとえば「言語学者と情報提供者の眼前にある顕著な出来事」(Quine [1960], p.29 [邦

訳44頁])に言及していることも理解できる。それはけっして、「刺激過程」についての先の説明に反する不注意な発言ではなく、その自然な拡大適用である。

しかしそうすると、『ことばと対象』で言われる「刺激過程」がもっぱら「翻訳者の活動に関する私の理論に属する」とする先のクワインの回顧の言葉は不正確である。『ことばと対象』ではむしろ、「刺激過程」が被験者にとっても言語学者にとっても観察可能（少なくとも観察によっておおむね推定可能）であることが強調され、言語学者はその推定を踏まえて翻訳を行うものとして描き出されていると言うべきである（一例だけを挙げれば、先のウサギと模造品の一節の最後の一文——「ガヴァガイ」と「ウサギだ」の使用を試験的に同等視する時、照合されるべきものは刺激過程であって動物ではない——で、「照合」を行うものと想定されているのはクワインではなく言語学者だと見るのが自然である）。

それゆえ、『ことばと対象』におけるクワインの立場は決して、「近位説」を基本としながら時に「遠位説」を示唆する不注意な言い回しを併用しているというものではない。定位点とされているのは「目に当たる有色光線のパタン」である。それは「感覚受容器の触発」の一步手前である点では、実質的に「近位説」に相当すると見ることもできるが、同時に、光線のパタンは観察可能な周囲の対象や出来事を通じて確認可能である点が強調されることで、実質的に「遠位説」と異なる性格も持つ。だが厳密に言えば、クワインの立場は「近位説」でも「遠位説」でもない。『ことばと対象』では、「目に当たる有色光線のパタン」に定位することで、「近位説」と「遠位説」が分化することなく微妙な均衡を保っているのである。

しかしその均衡は間もなく破綻する。そこから観察文の定義をめぐるクワインの迷走が始まる。

### 3. 講演「命題的对象」以後（1965年～70年代）

#### 3-1. 感覚受容器の相同性

『ことばと対象』の観察文理論において「近位説」と「遠位説」とが未分化なまま均衡を保ち得たのは、刺激過程に見立てられた「目に当たる有色光線のパタン」が、一方では観察可能な対象や出来事といった遠位的な対象と、また他方では感覚受容器の触発パタンといった近位的な対象と、緊密な対応関係を持つと想定されていたからである。つまり、誰もが観察しうる対象や出来事のパタンからは、目に当たる光線のパタンが推定され、しかも後者のパタンは、結果として生じる受容器の触発パタンと緊密に対応している、というふうになる。そのような想定があるからこそ、『ことばと対象』の理論は見ようによって近位説と遠位説の二つの顔を持ちえた。しかし、はたしてこの想定は成り立つのか。

クワインは1965年以後、この想定の妥当性について疑念を表明するようになる。そのきっ

かけは、感覚受容器の「相同性 homology」についての疑いである。観察文の定義には、文と対応づけられる「刺激過程」がどの話し手の場合にもおおむね一様であることが織り込まれていた。しかし、この点について、論文「命題的対象」には次のような一節がある。

「…刺激過程のパタンという基礎的な概念の細部には懸念の種がある。たとえば言語間の翻訳の基礎として、ある被験者の言語行動を別の被験者の言語行動と対応づける時には、一方の被験者の刺激過程と他方の被験者の刺激過程を同等視できることが決定的に重要である。しかし、どうすればそんなことができるのか。刺激過程のパタンを私の意味に取るなら、そのような同等視ができるためには受容器の相同性を仮定しなければならない。しかし、それは馬鹿げている。完全な相同性が成り立つようには思われなかりか、そもそも刺激過程の相同性を重要視するべきではないからである」(Quine[1969 b], p.157)。

ここでまず注目すべきなのは、「刺激過程」が「受容器」の問題と解されていることである。『ことばと対象』では特に言及のなかった「受容器」を持ち出すことについてクワインは特に説明を加えていないが、おそらくその理由は、ここでのクワインの考察が、もっぱら「自然化された認識論」の文脈に位置していることにある。現に、上の引用箇所直前には、「言語を自然現象として扱うかぎり、その出発点はつねに、一定の発話が一定範囲の感覚的な刺激過程のパタンと結び付けられているということではなければならない」<sup>(15)</sup>という発言がある。そして、すでに述べたように、認識の端緒を特定しようという認識論的な関心のもとでは、刺激過程の内訳は、目に当たる光線のパタンよりもむしろ、それを受けて様々に発火する受容器の触発パタンと取る方が自然である。

しかし、クワインはここで、刺激過程を受容器の触発として捉え直した上で、同一パタンの光線が目当たった時に生じる受容器の触発パタンが誰の場合にも一様だという想定に対して、二重の批判を向けている。一つには、その想定が成り立たないこと。もう一つには、そのような想定が、仮に成り立つとしても、的外れだということである。

第一の論点の裏付けとして、クワインは『指示のルーツ』(1974年)の脚注で、ダーウィンの『種の起源』に出てくる昆虫の神経網に関する所見を引用して次のように述べている。

「神経網の構造は、昆虫のレベルにおいてさえ、一つの種の成員間で驚くほど異なっている。『昆虫の大きな中枢神経節にちかい主要な神経の枝わかれがおなじ種の中で変異しているということは、予期されないことであった。……ところがごく最近にラボック氏は、カイガラムシの上記の主要神経で、木の幹が不規則に枝わかれするのと同様な程度の変異性がみられることを、証明した』」<sup>(16)</sup>。

クワインは詳しい説明を加えていないが、この種の所見が不都合なのは、別々の人間の刺激過程を比較する時に、どの受容器とどの受容器を対応づけたらいいかがはっきりしなくなる

ためである。そして、クワインは以後、別々の人間の間で受容器の触発パターンが類似するという論点に関しては一貫して慎重な態度を取るようになる<sup>(17)</sup>。

次に、受容器間のその種の対応づけが、仮に成り立つとしても「重要視されるべきではない (it surely ought not to matter)」という論点の理由は何か。この点についても明確な説明はないが、『ことばと対象』での議論の流れを踏まえれば、それが言語の公共性への配慮に由来することは明らかである。すでに引用したように、そこでは、「被験者の頭の奥深くを覗き込むことは、たとえ可能だとしても適切ではない」と言われ、「社会的なチェックに服するのが通例であるような条件に対する被験者の反応」こそが重要だとされていた。

クワインはこれらの問題にどう対応したのか。後年の回顧では、この時期、「私には次に取るべき一步が分からなかった」(Quine [1996], p.160) と述べている。とはいえ、クワインの考え方にいかなる進展もなかったわけではない。

### 3-2. 遠位説への傾き

一つの進展、あるいは変化は、観察文についてのクワインの説明が、表面上、「遠位説」に大きく傾斜することである。ただしそれは、近位説の放棄を意味するわけではない。むしろ、結論から言えば、観察文の概念に関しては行動主義的な言語観に依拠した特徴づけでひとまず満足し、その特徴づけが自然化された認識論の中でどのような捉え直しを被るかについては態度を保留している、というのがこの時期のクワインの基本的な姿勢である。

そのような経緯を示す一つの典型が、前掲の『指示のルーツ』である。そこでは、観察文の定義としてまず次のような説明が提示されている。

「ある文が観察的なのは、その真理値が、どのような場面でも、その場面を目撃する言語共同体のすべての成員によって、同じ判定を受ける限りにおいてである」(Quine[1974], p.39)。

ここで「場面」と呼ばれているものは何か。近位説からすれば、それは受容器の一定の触発パターンであるはずである。しかし、目下の説明では、「場面」は通常の言語使用者が「目撃」するものだとされている。そして、通常の言語使用者が受容器の触発パターンを「目撃」し、それを踏まえて観察文への判定を下すという想定は現実離れしている。とすれば、この場合の「場面」の実質は、誰もが観察しうる対象や出来事だと考えるのが自然である。ほぼ同時期の論文「自然的な知識の本性」(Quine [1975b]) では、この点がより明確である。

「観察文は場面文の一種だが、その場面は誰もが観察しうるものでなければならず、しかも、当の言語を話せるすべての目撃者が、その場面に居合わせればその文に同意するのでなければならない」(p.73. 同趣旨の発言として、cf. Quine [1977], p.157.)。

とはいえ、クワインは、彼の認識論において、観察文が体表刺激と科学理論の仲介者の役

割を演ずるという基本的な位置付けに修正を加えた形跡はない。そして、そのような位置付けからすれば、観察文と対応づけられるものが体表刺激ではなく遠位的な場面だというのは都合が悪いはずである。この点について、『指示のルーツ』では次のような補足説明が加えられている。

「この定義では共同的な目撃という言い方がなされている。より正確な言い方をする時には、この定義は、目撃者が受容器レベルで類似した衝撃を受けていることに言及するものとなるだろう。だがそうすると、この定義は……相同性の問題をまたしても引き起こす。

それでも、この定義は、拠り所とされている目撃者や言語共同体の概念と同じ位には明瞭である。行動主義的な概念としてはそれで上出来である」(Quine [1974], p.41.)。また、同時期の論文「経験的に同等な世界体系について」でも次のように言われる。

「観察性の行動面での表われ——目撃者の証言がつねに一致すること——は大まかな実用的基準にすぎない」(Quine [1975c], p.316)。

これらの発言から伺われるのは、遠位説を思わせる説明が、観察文の範囲についての目安を与えるものではあれ、厳密な定義とは見なされていないことである。厳密な定義はやはり受容器に定位したものでなければならない、とクワインは考えていた。とはいえ、その方向での理論の洗練は、先述の相同性の問題に直面して停滞している。遠位説はその穴埋めとなる暫定的な説明にあたる。

ここで注意しておきたいのは、近位説と遠位説の関係に関する以上の説明が、同時期の論文「心と言語傾性」(Quine [1975a])にある行動主義の位置付けに関する一般的な説明と、正確に対応していることである。クワインはそこで、言語現象に関する説明を心理主義的、行動主義的、生理学的の三つに分類し、それらを漸進的に深まっていく三つの説明レベルとして位置づけた。「行動主義」の捉え方に焦点を絞れば、そこでのクワインの主張は、二点に要約できる。第一は、すでに『ことばと対象』でも述べられていたように、行動主義は「文を発問して同意・不同意を求める操作」によって同意・不同意の「傾性」を明らかにする、という論点である。そして、第二は、行動主義的な考察によって確認される言語傾性が、実は「物理的な特性」(p.92)に他ならないという論点である。もちろん、一定の条件下で概してどのような振舞いが見られるかを特定することは、その基底にある生理学的なメカニズムを明らかにすることではない。その点では、行動主義的な考察は、傾性の物理的な基盤についての生理学的な考察とは区別される。ではあるが、一定の言語傾性を特定することは、「何らかの物理的特性を実際を選び出してみせることへの前置き」(p.93)なのだ、という点をクワインは力説する。そのことを要約的に述べたのが次の一節である。

「第二の〔行動主義の〕レベルでは行動傾性が扱われる。それらの傾性は実は生理学的

な状態なのだが、それらはもっぱら行動的な表われによって同定される。最も深い説明は生理学的である。それは、これらの傾性を、はっきり神経インパルスその他の解剖学的・化学的に同定された有機的過程に基づいて分析するものとなろう」(p.94. [ ]内は筆者の補足。)

このような釈明からすれば、行動主義とは物理主義の一形態、しかもその暫定的な形態だということになる。

遠位説と近位説の関係についての先の説明は、ここでの行動主義と生理学の相対的な位置付けをそのまま反映している。我々が観察文の範囲を限定する際に依拠するのは、一定の場面を目撃した被験者がどのような文への同意・不同意を促されるかについての行動主義的な考察であり、その種の考察に即して観察文を定義すれば、「遠位説」の性格を持つ定義が得られる。しかし、行動主義的な考察によって明らかになる同意・不同意の傾性は、クワインの理解では、実は一定の「生理学的な状態」に他ならない。そして、行動主義（つまりは遠位説に立つ説明）は、問題の傾性を「行動的な表われ」によって同定することには成功するが、その傾性の物理的本性についての「より深い」説明は生理学に委ねる。このような理解からすれば、より深い説明レベルに定位した定義は当然「近位説」に立つものでなければならない。

### 3-3. 行動主義と生理学

遠位説と近位説の関係についての以上のような説明を評価する際に何より問題になるのは、そこにおける行動主義の位置付けである。基本的な問題は、行動主義が物理主義の暫定的な形態だという理解が、行動主義の元来の動機であった言語の公共性という考え方と、両立するのかどうかである。

すでに第1節でも触れたように、言語の公共性という考え方は、言語理解の説明を「誰もが観察しうる」手がかりに求めるという形で、本質的に、被験者の視点への配慮を含んでいる。実際、論文「心と言語傾性」でも、クワインは、文が発問される際の場面が「誰にも認識可能 (intersubjectively recognizable)」(Quine [1975a], p.88) であるべきことを強調しているが、この場合の「誰にも」は、「すべての被験者に」の意味を明らかに含んでいる。しかし、行動主義が生理学の解明課題を暫定的に同定するものとして理解されている文脈では、行動主義はむしろ被験者の視点を度外視する方向を志向するように見える。だがそれは、言語の公共性という考え方の基盤を掘り崩すことにほかならない。

この点との関連で興味深いのは、観察文の理論に現われる心的な概念の処遇について、クワインの態度が微妙に揺れ動いているように見えることである。

たとえば、論文「心と言語傾性」では、クワインは観察文の理論に登場する心的な概念「同

意」「不同意」について、その心的な性格を払拭する方向での補足説明を行っている。この用語が問題にしているのは、同意の「心理的な成分」ではなく、「発話や振舞いそれ自体」であり、だから正確には「表層の同意 (surface assent)」と呼ぶのがふさわしい、というふうなのである (Quine [1975a], p.91)。このような措置は、物理主義の一形態としての行動主義が、心的な概念の運用とは相性がよくないという配慮に基づくものと思われる。

しかし、クワインの行動主義の出発点となった言語の公共性という考え方は、心的な述語の使用と背反するものではなく、それを不可欠な要素として含んでいる。「言語的意味のうちには、観察可能な状況における公然の行動から得られる以上のものは何も含まれていない」 (Quine [1992a], p.38. [邦訳, 55頁]) といった言い方自体、「観察」という心的な概念を用いずには定式化できないからである。もちろん、そのことは、心的な概念の放任を意味するわけではない。それは少なくとも、心的な現象についての私秘的な観点は排除する。たとえば、観察文を「観察を報告する文」といった形で定義するのが不都合なのは、その定義が、「観察」の内容が本人以外によっても確認可能であることを保証していないからである (Cf. Quine [1974], p.39)。また、意味それ自体といった抽象的な存在者の想定が攻撃対象になるのも、意味それ自体を把握する心的な働きについて、誰もが確認しうる識別基準を設定しがたいからである。だがこのような批判はけっして心的な概念そのものに向けられているのではない。言語の公共性という考え方は、外部から確認できる限りでの心的な働きならば十分に容認しうる<sup>(18)</sup>し、それを容認しなければ、誰もが「観察」しうるものに立脚した言語論を求めること自体が意味をなさない<sup>(19)</sup>。

さらに言えば、クワインは、言語学習や根本的翻訳の際に観察文が基礎的な役割を演ずることを論ずる文脈で、複雑な形での知覚の重要性を自ら強調している。たとえば、『指示のルーツ』には次のような一節がある。

「言語はおおむね言葉の列どうしの関係づけによって学ばれるが、どこかに非言語的な参照点、つまり間主観的に理解され、適当な発話と即座に結び付けられうる非言語的な状況がなければならない。…子供も親も、子供が「赤い」を学ぶ時には共に赤を見ていなければならない。さらに二人のうち的一方は、他方がその時に赤を見ていることを見ていなければならない」 (Quine [1974], pp.37-38. Cf. Quine [1975b], p.73.)。

ここでは、二人の人間が共通の対象を見、しかも相手はその対象を見ていることを見る、といういわば重層的な知覚（さらに言えば、その共通の対象の物象化）が、言語習得の前提として記述されている。また、やや先取りして言えば、後年のクワインは、この種の重層的な知覚を踏まえて相手の立場に自己を投影し、自分ならばどのような文の発話を促されるかを思い描くという「感情移入 (empathy)」が言語理解には不可欠であることを随所で強調するようにもなる<sup>(20)</sup>。

このように複雑な心的概念をかなり自由に駆使して行われる考察を、たんに「何らかの物理的特性を実際を選び出してみせることへの前置き」として位置づけることができるのかどうか。この点は、近位説の模索が本格化する80年代以後の著作の中で、言語の公共性という論点を強く擁護するデイヴィッドソンとの対質を通じて、より先鋭化した形で改めて問題化することになる。

とはいえ、それを見る前に、この時期の著作に見られるもう一つの進展にも簡単に触れておかなければならない。それは『指示のルーツ』で導入された「知覚的類似性 (perceptual similarity)」の概念である。この概念は『指示のルーツ』では観察文の問題と関連づけられていないが、80年代以後の理論の展開には大きな影響を及ぼすことになるからである。

### 3-4. 知覚的な類似性

クワインが知覚的類似性なる概念を導入することで解明しようとしたのは、直接には、異なる時点で同じタイプの場面が知覚されるという事実である。というより、この種の事実をあくまで感覚受容器レベルの問題として捉え直すために持ち出されたのが知覚的類似性の概念である。たとえば、ある人がある時にウサギを見、後に再びウサギを見るという事実を、クワインは、それぞれの知覚場面に対応する知覚者の人生の二つの時間切片の間に知覚的な類似性の関係が成り立つこととして捉え直す。そして、そのことがさらに、それぞれの時点で発火している感覚受容器の集合が行動面で同じような反応を促すこととして分析される<sup>(21)</sup>。要するに、同じタイプの二つの場面を知覚することが、それぞれの時点での感覚受容器の触発を条件とした行動傾性の問題として位置づけられるのである。

クワインは「知覚的類似性」の概念をより際立たせるために、それを「受容器的な類似性 (receptual similarity)」と対比する。受容器的な類似性は二つの時点で発火している受容器の集合の成員がどれだけ重複しているかによって測られる<sup>(22)</sup>のに対して、二つの集合の「知覚的な類似性」は、それぞれの集合が類似した行動面での結果をもたらすかによって測られる<sup>(23)</sup>、というふうに。先のウサギの例で言えば、最初にウサギを知覚する場面で発火している受容器の集合と二度目にウサギを見た時に発火する受容器の集合は、同じような行動的結果（たとえば、「ウサギだ」への同意）を促すがゆえに、二つの時間切片は知覚的に類似しているが、しかし、それぞれの時点では、問題の行動的結果とは直接関係のない無数の受容器も発火すると予想されるため、二つの時間切片の間には顕著な「受容器的な類似性」は見出されない。受容器的な類似性は受容器に定位した生理学的な概念なのに対し、知覚的な類似性は行動傾性に定位した行動主義的な概念である。

このような考察は、観察文と受容器の関係について、一つの示唆を与える。つまり、観察文が一定範囲の刺激過程（受容器の触発）と対応づけられる時に、対応づけられる刺激過程

の「範囲」を決めるのは、「受容器的な類似性」ではなく、促される行動（同意・不同意の表明）に照らして確認される「知覚的な類似性」だということである。

しかし、『指示のルーツ』のクワインは、この論点を観察文の定義には持ち込んでいない。それは、「知覚的な類似性」が、あくまでも各個人の内部でのみ成り立つ関係だと考えられていた<sup>(24)</sup>ためである。当時のクワインの想定では、共同体レベルでの観察文の定義のためには、受容器の間主観的な類似性を想定する必要がある。しかし、知覚的な類似性はその任には堪えないのである。

しかし、それではなぜ知覚的な類似性の関係は各個人の内部でしか成り立たないのか。それは、クワインが、「知覚的な類似性」の関係を、「受容器的な類似性」とは区別しながらも、実質的にはそれに準ずる関係として捉えているためである<sup>(25)</sup>。たとえば、ある人が二つの場面で「ウサギだ」に同意するという事実は、クワインの理解では、それぞれの時点で発火している感覚受容器からなる二つの集合が同じような行動を促すことを意味している。すでに述べたように、クワインはこの二つの時点の間には顕著な「受容器的な類似性」が成り立たないと考えた。どちらの時点で発火している受容器の集合にも、「ウサギだ」の発話とは直接関連しない受容器が数多く含まれているため、全体として、二つの集合の間の重複はあまり大きくはないと考えたからである。しかし、クワインはまた、問題となる言語行動と密接な関わりをもつ受容器だけに考察を限定して、二つの集合の内の適当な部分集合どうしを比較すれば、両者の間には著しい重複があると考えた<sup>(26)</sup>。それが、クワインの言う「知覚的な類似性」の実質だった。知覚的な類似性の存否の確認は行動面に現われた結果に照らして行われるが、その実質はやはり受容器レベルでの物理的な関係にある、とクワインは考えていた<sup>(27)</sup>。敢えて誇張的な言い方をすれば、知覚的な類似性とは、考慮すべき受容器の範囲を限定した場合の受容器的な類似性に他ならない。知覚的な類似性の関係があくまで各個人の内部で成り立つ関係だとされるのもそのためである。それゆえ、知覚的な類似性は、それだけでは、社会レベルでの観察文の定義には使えない。

ただし、この時期のクワインは、別々の人間のもとで起こる刺激過程の間に、受容器の重複はなくても、何らかの対応関係を想定できるかもしれないという期待をまだ捨てていない<sup>(28)</sup>。だがそれがどのような対応関係なのか、この時期のクワインには成案がなかった。

#### 4. 近位説 (1981年～)

##### 4-1. 定義

3-1節で述べたように、論文「命題の対象」以後のクワインは、異なる個体間での刺激過程の類似性という想定に対しては慎重な態度を取るが、しかし、ある個体の内部でならば、

刺激過程の受容器的な、また知覚的な類似性という概念は意味をなすものと考えていた。それを出発点として観察文に関する「近位説」を模索したのが、論文「経験的内容」（1981年）以後の一連の著作である。そこでは、観察文の概念を個々の話し手に相対化した上で、次のような定義が示される。

「観察文とは、その話し手が、感覚受容器がある一定の仕方で触発される時には一貫して同意し、別の一定の仕方で触発される時には一貫して不同意を示すような場面文のことである」（Quine [1981a], p.25. [邦訳138-9頁] Cf. Quine [1984], p.332.）。

この定義は、観察文と結び付けられる「刺激過程」をはっきり感覚受容器の触発パターンと同一視するものであり、紛れもない「近位説」である。『真理を追って』では、より明確に、「刺激過程」が「被験者の感覚受容器のうちで問題の場面で触発されたものすべてを時系列に並べた集合」<sup>(29)</sup>と同一視される。もちろん、上の定義のすぐ後で付け加えられているように、「感覚受容器の厳密に同一の集合全体が二度触発されることはありそうもない」<sup>(30)</sup>。それゆえ、観察文と結び付けられるものは、厳密には、その文への同意を促す点で類似（知覚的に類似<sup>(31)</sup>）した一連の刺激過程（つまりは、受容器の集合の集合）だということになる。それが、当の観察文の「(肯定的な) 刺激意味」<sup>(32)</sup>である。

このように受容器に即した定義が容易なのは、観察文の概念が各個人に相対化されているからである。しかし、『真理を追って』によれば、この時期のクワインは、ここから次の条件によって、集団にとっての観察文を定義できると考えていた。

「ある文が共同体全体にとって観察文であるのは、それがすべての成員にとって観察文である場合である」（Quine [1992a], p.40. [邦訳58頁]）。

この定義のポイントは、刺激過程の間主観的な類似性を想定することなく、しかも、「誰もが観察しうる状況」への言及を巧妙に回避することで、受容器に定位した近位説の立場を維持できるように見える点にある。しかし、それはうまくいっているのか。

『真理を追って』のクワインは、上記の定義がそのままの形では維持しがたいことを自覚している。以下ではその問題点とクワインの対応を、クワインも承知していた二種類の問題事例に即して見ていくことにしたい<sup>(33)</sup>。一つはD・デイヴィドソンが挙げた事例であり、その要点は、クワインの定義に出てくる感覚受容器への言及が、言語習得や翻訳の場面を考える限り、実質的な役割を演じていないことにある。もう一つの事例はL・ベルクシュトレムによるものであり、その要点は、観察文に期待されている《判定の間主観的な一致》という条件を上記の定義が確保できていないことにある。

#### 4-2. デイヴィドソンの事例：行動主義的な言語観と自然化された認識論

まずデイヴィドソンが論文「意味と真理と証拠」で挙げた事例を引用しよう。

「…私ならば視野の中にウサギがいる時に持つパタンの刺激過程を、イボイノシシが駆け抜けていく時に持つ人がいるとしよう。そしてイボイノシシが彼に同意を促す一語文は『ガヴァガイ』だとしよう。刺激意味に従って、私は彼の『ガヴァガイ』を私の『そら、ウサギだ』へと翻訳する。しかし私から見ると、彼がウサギがいると言い、信じる時には、ウサギはいないでイボイノシシだけがいる」(Davidson [1990], p.74)。

デイヴィドソンによれば、この空想的な事例が示しているのは、感覚受容器の触発パターンという意味での「刺激過程」にもとづく観察文の定義が、翻訳や言語学習の現場に即した考察と、食い違うことである。この事例で、「ウサギだ」と「ガヴァガイ」は、それぞれの発話の際に観察される周囲の状況は異なるのに、対応づけられるべき刺激過程はよく似ていると想定されている。それゆえ、刺激過程こそが翻訳を媒介するというクワインの考えからすれば、二つの表現は同等だということになる。しかし、そのような翻訳を受け入れると、我々はイボイノシシに関する非常に奇妙な信念を相手に帰属させなければならない。しかも、そのような事態は、発話場面において誰もが観察しうる周囲の対象や出来事に準拠して、「ガヴァガイ」を「イボイノシシだ」と訳しさえすれば、回避できるはずのものである。それゆえ、正しい翻訳は、クワインには反して、感覚受容器の触発パターンではなく、観察可能な状況に照らして決定されるべきだ、とデイヴィドソンは主張する。この主張は、本稿での言い方に即せば、観察文理論に自然主義的な認識論の関心を混入させることへの抗議として読むことができる。観察文についての考察は、言語の公共性を踏まえた行動主義的な言語観の中にこそ居場所を持つ、というのがデイヴィドソンの立場である。

クワインから見れば、デイヴィドソンの事例は、別々の人間の受容器の触発パターンが互いに類似するというすでにクワインが退けた想定に依拠している点で、そのままの形では受け入れ難い。とはいえ、刺激過程についての考察が、言語習得や翻訳の場面についての行動主義的な考察とは食い違うという点については、『真理を追って』の中に、デイヴィドソンの指摘をほぼそのまま受け入れた次のような一節がある。

「たしかに、観察文「ウサギだ」が言語学者にとって持つ刺激意味は、「ガヴァガイ」が原地人にとって持つ刺激意味とは異なる。しかし、これら二つの文の類縁性は、コミュニケーションに付随する外部的な事情の内に求められるべきである」(Quine[1992a], p. 42 [邦訳60頁])。

実質的にこの応答は、翻訳を媒介するものが、近位的な「刺激過程」ではなく、遠位的な状況であることを認めるものである<sup>(34)</sup>。しかし、それを認めるのならば、観察文の定義に刺激過程(感覚受容器の触発)への言及を織り込んでおくことに、どんな意義があるのか。

この種の疑問に対する答は、先に3-2節で触れた論文「心と言語傾性」での考え方に即せば、次のようになるだろう。つまり、刺激過程は、たしかに行動主義的な考察のレベルでは何の

役割も演じないが、しかし、行動主義的な考察によって同定された言語傾性に関する生理学的な説明のレベルには間違いなく登場するのだ、というふうに。

しかし、デイヴィドソンの事例の狙いは、こうしたクワイン流の応答への反論にあると言わなければならない。我々が他人の言語行動を理解する際に依拠するのは、間主観的に観察可能な当の言語行動とそれを取り巻く周囲の状況である。その際に起こっている生理学的な過程は、他人の言語行動を理解する人間が関知する所ではなく、ましてや、言語行動の理解の拠り所となるものでもない。そして、そのような過程への言及を言語理解についての説明の中に持ち込むことは、言語の公共性というクワインが強く擁護する考え方とも相容れない。とすれば、近位説に固執することによどのような意義があるのか――。

こうした反論の背景には、デイヴィドソンの非還元的な物理主義の立場（いわゆる「非法則的一元論」）が控えている。言語行動に関する記述には多様な心的な語彙が盛り込まれているが、デイヴィドソンによれば、そのような記述を物理的な語彙だけを用いた記述に法則的に還元することはできない。もちろん、これは、言語行動について、純然たる物理的記述が不可能だと言うのではない。そのような記述は確かに可能だが、しかし、それは言語理解のメカニズムの解明につながるものとはなりえない、というのがデイヴィドソンの立場である。デイヴィドソンが観察文の定義の中に生理的な過程に関する物理的記述を盛りこむことに反対するのも、そのためである<sup>(35)</sup>。

この反論に対するクワインの応答はやや複雑である。一方でクワインは、『真理を追って』で、デイヴィドソン流の非法則的一元論を受け入れる旨の発言を行っている。それは、クワインの言い方では、

「心的実体は存在しないが、物理的な出来事や状態を分類する際の還元不可能な心的様式は存在する」(p.72, 邦訳106頁)

とする立場である。言語論の文脈に即して言い換えれば、言語行動やその理解はあくまでも物理的な過程であって、純然たる物理的な記述が可能だが、しかし、我々が言語行動やその理解に関して行っている心的な語彙を交えた記述は、その種の物理的な記述には還元できない、ということである。この点は次のような例に即して考えるのが分かりやすいだろう。たとえばAさんがある時点 $t_1$ において文Pに同意し、また、後の時点 $t_2$ においても文Pに同意し、さらに別の時点 $t_3$ において別の人物Bさんもまた文Pに同意するという場合、時間を隔てた三つの出来事はどれも「文Pに同意する」という共通の心的な記述によって分類される。しかし、非法則的一元論が主張しているのは、これらの出来事はいずれも物理的な出来事であるにもかかわらず、「文Pに同意する」の実質的な内容を、問題の出来事すべてに共通する純然たる物理的な記述によってパラフレーズすることはできない、ということである。これは、クワインの観察文理論の文脈に即せば、先に触れた感覚受容器の相同性の想定を、クワ

インが最終的に放棄したことを意味している。

しかし、この点での譲歩にも拘らず、クワインはデイヴィドソン流の遠位説に全面的には同調せず、近位説を維持しようとする。そして、なぜそのようなことが可能なのかを説明する際にクワインが強調するのが、言語論と認識論の「関心」の違い、という論点である。そのことが最も明瞭なのは、論文「三つの不確定性」(1990年)である。

「…デイヴィドソンは刺激過程の間主観的な類似性を確保するために、刺激を体表ではなくもっと外に、二人の被験者の問題となる行動の共通原因のうち、行動に最も近いものの所に位置づけることを提案した。……しかし、私は刺激過程を神経入力地点に位置付ける点に関しては譲らない。自然化されているとはいえ、私の関心は認識論にあるからである。私が関心を寄せているのは、感官の触発から科学の表明へと向かう証拠の流れであり、また、物象化の根拠や、認知的意味という概念の信用証明(そのようなものがあるとして)である。根本的翻訳についての私の思弁を動機づけているのは、このような認識論的関心であって、言語学への一時的な関心ではない。実際、そうであるからこそ、私は翻訳の文学的あるいは詩的な側面を無視したのである」(Quine[1990b], p. 3. cf. Quine [1992a], p.41 [邦訳59-60頁])。

実質的にここで行われているのは、観察文を問題にする際に、言語の公共性を旨とする行動主義の視点よりも、自然化された認識論の視点を優先する、という態度表明である。

もちろん、言語理解についての説明を行う際には、クワインは依然として言語の公共性を重視し、行動主義的な考察を展開する。そして、その文脈では、デイヴィドソンが言うように、遠位説が自然であることをクワインは認める。行動主義的な考察からすれば、観察文の習得や翻訳の際に問題になるのは、周囲の対象・出来事の観察を踏まえた感情移入であって、感官の触発ではない。たとえば「ガヴァガイ」を「ウサギだ」と訳す場合ならば、言語学者は、自分がウサギを目撃している場面で、現地人もまたウサギを目撃しているのを目撃し、しかも、現地人が「ガヴァガイ」と言うのを目撃する。その上で、自分ならばこの状況では「ウサギだ」の発話を促されるだろうという感情移入に基づく判断に照らして、「ガヴァガイ」を暫定的に「ウサギだ」と訳す。そのような経緯を要約して、クワインは、「子供の場合でもフィールド言語学者の場合でも、言語の学習を支配しているのは感情移入だ」(Quine [1992a], p.42 [邦訳61頁])と述べている。

しかし、自然化された認識論者から見れば、翻訳の手順に関するこのような記述は、間違いではないが、そのままの形では受け入れがたい。自然化された認識論者が関心を寄せるのは、感官の触発から出発して外界の事物に関する科学的な知識が成立するに至る経緯である。ところが、上の記述では、その経緯の多くの部分が無造作に前提されている。つまり、現地人と言語学者によるウサギその他の対象の物象化が、説明されることなく前提されている。

その点を前提することなく、解明課題として位置づけるには、行動主義的な考察の成果を、自然化された認識論の立場から記述し直す必要がある。その際にクワインが立脚点とするのが、感官の触発である。たしかに行動主義的な記述の中には、感官の触発への言及は一切登場しない。それは、行動主義者が、現地人や言語学者の視点を尊重し、彼らが観察し得ない要素は記述の中に持ち込まないからである。しかし、自然化された認識論者にはそのような配慮は求められていない。行動主義的に記述された観察文をめぐる事実を生理学的に究明するならば、そこには明らかに——現地人や言語学者が自覚していようといまいと——感官の触発という事実、さらには感官の触発と観察文への同意・不同意の間の緊密な因果関係という事実が介在している。そして、自然化された認識論における観察文の位置付けを明確化する上では、感官の触発と同意傾性の間の密接な因果関係が確保されさえすれば事足りる。なぜなら、その点が確保されれば、観察文がクワインの認識論で果たすべき役割、つまり《体表刺激と緊密な因果関係を持つと同時に、文として、理論文と論理的なつながりを持つ》という中間項の役割は維持されるからである。

クワインはこうした関心の違いを、さらに「プロット（話の筋）」と「セッティング（背景設定）」の違いという言い方で敷衍している。

「私は自然主義者なので、神経末端やウサギやその他の物理的対象に自由に言及できるが、私の認識論からすれば、被験者にそのような出発点を認めることはできない。**被験者によるウサギその他の物象化は、私にとってはプロットの一部であり、セッティングの一部として見過ごすわけにはいかない**」(Quine [1990a], p.42. 斜体は原文に従う。Cf. Quine [1990b], p.3.)。

私なりに言い直せば、行動主義的な記述で前提される被験者によるウサギの物象化は、認識論的な説明の中では、前提となる道具立て（セッティング）の一部ではなく、説明の内容を構成する一齣（プロット）として捉え直される、とでもなるだろうか。自然化された認識論者はすべての科学的知見を活用してよいが、被験者がそれらの知見を所有していることを最初から前提したのでは、感官の触発から科学理論が生成してくる過程を問うという問題設定自体が抹消されてしまう、というのがここでの要点である<sup>(36)</sup>。

クワインは以上のような区別を通して擁護される自らの立場を、「デイヴィッドソンの遠位説と私の旧来の近位説の間の中間的な立場」(Quine[1990c], p.80)と呼んでいる。その要点は、行動主義的な言語観と自然化された認識論の「関心」の違いを強調した上で、前者の文脈では近位説を放棄し、後者の文脈では近位説を維持する点にある。その関連で持ち出される「プロット／セッティング」の区別は、行動主義的な考察の成果を、自然化された認識論の視点から読み替えるための道具立てに他ならない。

このような軌道修正の結果、クワインは言語論の文脈ではデイヴィッドソンと和解するが<sup>(37)</sup>、

認識論に関しては対立が残されている。デイヴィドソンは、認識論の文脈においてさえ、観察文の特徴づけに生理学的知見を持ち込む意義について懐疑的な立場を取っているからである。とはいえ、その点についての検討に立ち入る前に、もう一つの問題事例に触れておかなければならない。その事例は、実はクワインによる観察文の定義が、上記のような軌道修正を受け入れてもなお難題を抱えていることを示しているからである。

#### 4-3. ベルクシュトレームの事例：「発話の場面」

L・ベルクシュトレームは論文「クワインにおける決定不全性」の中で、クワインの定義にとって不都合な例文として「寒い」と「あれはアナウサギだ」の二つを挙げている (Bergstroem [1990], p.39)。ベルクシュトレームによれば、「寒い」はどの話し手にとっても観察文だが、しかし、寒さに敏感な人もいれば鈍感な人もいることを考えれば、同じ場面において、ある人は「寒い」に同意し別の人は同意しないという食い違いが生じる。つまり、「寒い」は上記の定義からすればある集団にとっての観察文であるのに、それについての判定は間主観的に一致しない場合がある。また、アナウサギ (rabbit) とノウサギ (hare) を混同している人が多いことを考えれば、「あれはアナウサギだ」という文もまた、各々の話し手にとっては観察文であり、それゆえに集団にとっての観察文でありながら、それぞれの話し手がこの文に同意する状況は食い違う。

クワインはこの種の事例が不都合であることを認める<sup>(38)</sup>。実際、その類例はクワインの過去の論文「自然的知識の本性」(Quine [1975b])にも挙がっていた。

「釣り人の文『当たりがきた』は、発話状況に応じて真になったり偽になったりするが、関連する状況は話し手だけに隠されていて、すべての臨席する目撃者が共有するものではない。『当たりがきた』は場面文だが、私の意味での観察文ではない」(p.72)。

クワインがこの種の文を観察文と見なさないのは、ベルクシュトレームが指摘した通り、それが同じ場面における判定の間主観的一致という条件を満たしていないからである。

クワインはこの種の事例への対応として、「自然的知識の本性」では、文への同意を促す場面が「間主観的に観察可能」(p.74)であることを要求していた。『真理を追って』でクワインが提示した修正案もそれと同趣旨である。それは、各個人に相対化された観察文の定義は維持したまま、集団にとっての観察文の定義に新たな条件を加えるものである。

「……ある文がある集団にとっての観察文であるのは、それが各々の成員にとっての観察文であり、しかも、各々の成員が発話の場面を目撃して直ちに行う同意や不同意が一致している場合である」(Quine [1992a], p.43. [邦訳62頁] 斜体は原文に従う)。

追加された条件の趣旨は、共通の場面の目撃という事態を持ち出すことで、観察文と刺激過程との対応づけが誰の場合にも一致していることを確認する場を設けることにある。この条

件を定義に織り込めば、ベルクシュトレームの挙げた事例は集団レベルでの観察文ではないことになり、問題は解消される。

しかし、これは、近位説の放棄に等しい。各個人に相対化された形での定義は感覚受容器の触発に言及する形を維持しているが、観察文への判定が間主観的に一致するという事実を説明する段階での上記の修正案には、受容器の触発の代わりに、「発話の場面」という遠位的な対象が現われる。観察文の定義にこの種の概念が持ち込まれる限り、クワインの立場は近位説とは言えない。修正案は、被験者と言語学者がともに一定の遠位的な対象を物象化し、それを間主観的に目撃する、という事実を前提している<sup>(39)</sup>。

「発話の場面」の導入は、観察文の定義からいったん排除された行動主義的な言語観を、再び呼び戻すことに等しい。そのことは、クワインが「発話の場面」について、上の定義の直後に次の説明を添えていることから明らかである。

「何をもって問題の場面の目撃と見なすかは、翻訳の場合と同様、自らを目撃者の立場に投影することによって判定される」(Quine [1992a], p.43, 邦訳62頁)。

この補足説明からすれば、「発話の場面」は、観察文の因果的来歴についての生理学的な考察よりもむしろ、観察文の同定・翻訳についての行動主義的な考察の文脈に属する。この種の行動主義的な概念を定義に織り込むのだとすれば、言語論と認識論の「関心」の違いを強調して、認識論においては近位説を取るとする先のクワインの立場表明は、空文化していると言わざるをえない。そして、そうした「場面」が「目撃」されるという規定によって、実質的にクワインは、被験者による物象化を、「プロット」ではなく「セッティング」の側に持ち込んでいると思われる<sup>(40)</sup>。

結局、近位説を維持したければ、判定の一致を確認する準拠点となる遠位的な状況（またその目撃）について、自然化された認識論の立場からする新たな特徴付けを模索するほかはない。しかし、同一の場面の目撃という事態についての純粋に物理主義的な特徴づけとはどのようなものなのか。その点についての最終的な回答が示されるのは、最晩年の著作においてである。

## 5. 最終的な立場（1995年～2000年）

クワインは没年に公刊された文章の中で、観察文に関する自らの最終見解を示す著作として『刺激から科学へ』（1995年）と「二つの前線での進歩」（1996年）を挙げている(Quine [2000 b], p.408)。しかし、定義の文面を見るかぎり、この時期のクワインの立場は、すでに『真理を追って』で述べられていたものと異ならない。論文「私とあなたとそれ」（2000年）でも次のような説明が繰り返されている。

「観察文は場面文であり、場面に応じて真理値が変わる。場面文がある話し手にとって観察文の資格を持つのは、その話し手が、適当な刺激を受ければ即座にその文に同意する傾向性を持つ場合である。それがあつた話し手社会にとって観察文であるのは、それがその社会の各々の成員にとって観察文であり、しかもさらに、ある場面を目撃したすべての成員が同意や不同意の点で一致する場合である」(Quine [2000a], p.2)。

この定義では、『真理を追って』と同様、社会レベルでの観察文に関わる部分で、すべての成員による共通の目撃対象となるような遠位的な「場面」への言及が行われている。それゆえ、定義の文面に即するかぎり、クワインの最終的な立場は、デイヴィッドソン流の遠位説であり、近位説は事実上放棄されていると言わなければならない。

しかし、重要なのは、クワインが、遠位説に譲歩しながらも、依然として次のような問題意識を維持していることである。

「なぜ、遠位的な原因——一緒に観察された対象——が同じであるというだけのことが、因果連鎖の近位的な部分——二人の観察者の内部に位置した部分——での差異性よりも大きな影響力を持ち、依然として一致した反応をもたらすのか。要するに、翻訳者や辞書編集者が無造作に遠位的刺激で満足できるのは——実際、満足してよいわけだが——なぜなのか」(Quine [1996], p.160. 斜体は原文に従う)。

ここでの問いの立て方から明らかなように、クワインは、一定タイプの遠位的刺激が一定タイプの反応の原因となる際に、「因果連鎖の近位的な部分」にはいかなる解剖学的な相同性も成り立たないことを認めている。しかし、近位的なレベルで「相同性」が成り立たないにもかかわらず、遠位的な対象と我々の反応の間に対応関係が成り立つのはなぜなのか。それがクワインの観察文理論が最後に直面した問いである。

クワインはこの問いに答える前に、すでに『指示のルーツ』で提示されていた知覚的類似性の概念を用いて、この問いの趣旨を次のような形で敷衍する。いま、ある人物Aがある時点 $t_1$ でウサギを見て「ウサギだ」に同意し、また別の時点 $t_2$ でもウサギを見て「ウサギだ」に同意するとしよう。その場合、 $t_1$ で発火しているAの受容器の集合と、 $t_2$ で発火している受容器の集合は、内訳は完全には一致しないが、少なくとも同じタイプの行動の結果をもたらす点では互いに類似関係を持っている。それが知覚的類似性の関係である。同様に、別の人物Bが時点 $t_3$ にウサギを見て「ウサギだ」に同意し、時点 $t_4$ にもウサギを見て「ウサギだ」に同意するなら、 $t_3$ で発火しているBの受容器の集合と、 $t_4$ で発火しているBの受容器の集合は、互いに知覚的に類似している。もちろん、先に3-4節で確認したように、クワインの考えでは、知覚的類似性の関係は個人内部で成り立つ関係であり、Aの受容器集合とBの受容器集合の間に間主観的な知覚的類似関係は成り立たない<sup>(41)</sup>。しかし、Aの内部で成り立つ知覚的類似関係と、Bの内部で成り立つ知覚的類似関係は、ウサギという遠位的対象を媒

介項として、互いに噛み合っている。クワインの言い方では、

「一般に……外部の出来事が二つの場面で我々の双方に神経入力を生じさせ、しかもあなたの二つの入力あなたがあなたにとって知覚的に類似している時は、私の二つもまた概して知覚的に類似している」（Quine [2000a], p.2. Cf. Quine [1995b], p.21）。

クワインは、このような間主観的な対応関係を、ライプニッツの言葉に因んで、「知覚的類似性の尺度の予定調和」<sup>(42)</sup>と呼ぶ。クワインがあえてこのような言い方をするのは、AとBの行動的反応の一致が、受容器レベルでの同一性や類似性に裏付けられたものではないことを強調するためである。AとBは受容器を共有しておらず、また、二人の受容器の間には「相同性」（Quine [1996], p.160での言い方では「解剖学的な類似性 anatomic likeness」）も成り立たないが、それにもかかわらず、同じ遠位的対象に直面する際の二人の行動的反応は一致する<sup>(43)</sup>。それが、「予定調和」である。このような用語法に即せば、前段落で引用したクワインの設問は、次のように言い換えることができる。すなわち、こうした「予定調和」が成り立つのはなぜなのか、と。

この問いに対するクワインの回答は、あっけないほど簡潔である。それは「自然選択」の結果だ、というのがその答えである。クワインの言い方では、

「この調和を引き起こすのは相互行為でも解剖学的な相同性でもない。それは自然選択によって preestablish されている」（Quine [1999], p.45）。

答えがこのように簡潔なのは、それが実質的な回答というより、回答の指針の性格を持つからである。クワインが主張しているのは、遠位的なレベルでの一様性と近位的なレベルでの差異性がいかに架橋されるかという問題は、進化論の観点からする神経メカニズムに関する科学的研究によって明らかにされるべきだということであり、また、その種の科学的研究は、科学的であると同時に哲学的な重要性を持つということである。

この主張の意味をより明瞭に理解するには、それを前節でも触れたデイヴィッドソンの立場と対比してみるのが好適である。デイヴィッドソンは、クワインの行動主義的な言語観には深く共鳴しながらも、言語論や認識論に生理学的な考察を盛り込もうとするクワインの自然主義的な傾向には強く反対する。その背景にあるのは先述の非法則的一元論だが、それに加えて、より当面の議論に即した論点としてデイヴィッドソンが強調するのは、次の二点である。第一に、言語行動の際の神経生理学的過程についての考察は、我々が問題の言語行動の「内容」を特定する際の拠り所となりうるものではない。また、第二に、神経生理学的な過程は、我々の言語行動の原因あるいは因果的条件とは見なしようが、我々の言語行動を「正当化」する論理的理由にはなりえないことである（Cf. Davidson [1990], [1999]）。

クワインは、すでに『真理を追って』で、言語論においては遠位説が適切であることを認めた段階で、第一の異論は受け入れている。やや微妙なのは第二の異論の評価である。たし

かに、もしもクワインが、神経生理学の研究に、我々の言語行動を正当化する理由を求めているのなら、クワインの探究は、デイヴィドソンが指摘する通り、因果的原因と論理的理由とを混同するものとして批判されてしかるべきである。しかし、はたしてクワインにそのような混同を帰することができるのかどうか。すでに別稿（清塚 [2002]）で論じた結論だけを述べれば、晩年のクワインはそのような混同を免れている。クワインが求めているのは言語行動の因果的なメカニズムであり、そのメカニズムによって言語行動が正当化されると考えているわけではない。

それゆえ、最終的に問題になるのは、クワインが哲学的な認識論の課題として想定した神経生理学的な研究が、どのような意味で「哲学的認識論」の名に相応しいのかという点である。デイヴィドソンは、すでに第1節でも引用したように、その種の研究は「現在では哲学とは随分かけ離れたものとなっている科学の段階」（Davidson [1999], p.84）に属するものだと考えている。実際、先のデイヴィドソンの異論が正しければ、生理学的な研究の成果は、我々の発言や態度の「内容」を特定する役には立たず、それらを「正当化」するものでもない。そして、クワインもこの二点は受け入れている。だとすれば、哲学的な言語論や認識論の中にあえて神経生理学的な研究を織り込もうとするクワインの努力にはどのような意味があるのか。

とはいえ、クワインの思索を正當に評価するためには、こうした反問が、哲学的な言語論や認識論の範囲を過度に狭めている可能性があることに留意すべきである。「なぜ遠位的刺激で満足してよいのか」「なぜ予定調和が成り立つのか」というクワインの問いが求めているものを、遠位的な刺激に即して発言内容を理解したり、それを正当化したりする我々の営為全体の正当化だと考えねばならない必然性はない。それは、もう少し緩く、この種の我々の営為が自然的な過程全体の中で占めている位置、いわば自然的な文脈の解明を求める問いとして受け止める余地もある。そして、クワインが主張していると思われるのは、その種の文脈の知識が、発言の解釈や正当化に直接関与するものではないまでも、それに関する我々の考え方に大きな影響を及ぼしうるという点である。

もちろん、クワインはそれがどのような種類の影響であるかについては多くを語っていない。彼はただ、自然主義的な認識論が目指すべき方向性を、最も原理的なレベルにおいて示したにとどまる。しかし、それが哲学的な言語論や認識論に関する伝統的な理解に立脚したデイヴィドソン流の異論によってア priori に排除されるものではないことは、すでにこれまでの論述から明らかであろう。クワインの立場の評価は、科学的な認知研究の進展が言語理解や認知に関する我々の理解にどのような変化を及ぼすかという点を慎重に見守っていく中ではじめて定まってくると言わなければならないのである。

[注]

- (1) 本稿の前身は第34回日本科学哲学学会大会（2001年11月）における「クワイン追悼ワークショップ」提題の際の配布原稿である。提題の骨子は翌年『科学哲学』35巻2号に掲載されたが、ここでは「観察文」の定義を細部にわたって分析した当初の原稿は紙幅の都合から大部分を削除する結果となった。本稿はその削除部分を改稿したものである。
- (2) Quine [1948], p.16. [邦訳24頁]
- (3) Quine [1951], p.44. [邦訳66頁]
- (4) Cf. Quine [1952], p.225: 「私の考えでは、直接的に（少なくとも外的な対象の領域よりもより直接的に）明らかであるような実在を探し求めるのは間違いである」。Quine [1955], p.251: 「物理的対象の措定はデータの事後的な体系化と見るべきではなく、それ以前には体系化されるべきいかなる理解可能なデータも存在しない指し手と見るべきである」。Quine [1960], p.2 [邦訳, 3頁]: 「…直接経験はそれだけでは自律的領域としてのまとまりをなさない。直接経験にまとまりを与えるのはたいていは物理的な事物への言及である」。
- (5) Cf. Quine [1969a]. すでに Quine [1954] では、認識論の問題は「外部世界についての自然科学、とりわけ人間という動物に関する心理学の問題」であると述べられている(p.230)。
- (6) 典型的な一例: 「感覚受容器における刺激過程が、世界の描像を獲得する際に誰もが最終的に受け入れざるをえない証拠のすべてである」(Quine [1969a], p.75 [邦訳, 52頁])。
- (7) この辺の事情は『真理を追って』の第2節に詳しい。
- (8) Quine [1992a], p.38. [邦訳, 55頁]
- (9) Quine [1960], p.44. [邦訳, 69頁]。同趣旨の言い回しとして、「科学的な仮説のための証拠の貯蔵庫」(Quine [1969a], p.88 [邦訳, 60頁])、「科学的な証拠の担い手」(Quine [1992a], p.5 [邦訳, 7頁])。
- (10) Quine [1960], p.44. [邦訳, 69頁]。すでに Quine [1954] には、「主に常識的な大規模な対象への適用のために用いられるような述語の場合、その適用に関して観察者の間で一般的な合意が得られるのは明らかに好都合である。そのような適用のうちにこそ科学のデータの間主観性が宿っているからである」(p.245)という発言がある。また、Quine [1969a] では、観察文が「科学理論の最高裁」と呼ばれるに相応しい理由を説明して、「なぜなら、我々の定義によれば、観察文は、一様な刺激過程の下ではすべての成員が同意する文だからである」と述べている (p.87)。さらに Quine [1977] でも、「科学者が問題含みの仮説の証拠を寄せ集める時に拠り所にするのも観察文である。なぜなら観察文の特色は、現在の目撃者が通常は即座に一致した判定を下す点にあるからである」(p.157)と言われる。その他の関連箇所として、cf. Quine [1974], p.40; [1993], pp.110-111; [1995b], pp.44-45.
- (11) この点に関して微妙な解釈上の問題を生じさせるのは、「観察文の不可謬性」に関するクワインのコメントである。曰く、観察文とは理論的な要素の少ない文のことであり、そのゆえに「誤謬や異論の余地がない」(Quine [1960], p.44)。これは観察文が「科学のデータ文」の資格を持つことについて、判定の一致以上の裏付けを与えるもののようにも読める。クワインのこの種の発言が彼の思想体系の中で占める位置については、清塚 [2002] を参照。
- (12) クワインがこの関連で多用する「刺激 stimulus」「刺激過程 stimulation」等の言い回しについては古田 [2000], pp.105-106が参考になる。また、清塚 [2002], n.2を参照。
- (13) 以下で用いる「近位説」「遠位説」という訳語は富田 [1994] に従う。

- (14) この点の指摘は Follesdal [1995], pp. 55-56に負う。
- (15) Quine [1969b], p.157
- (16) Quine [1974], p.24, fn.2. [ダーウィン『種の起源』八杉龍一訳, 岩波文庫, 上巻67頁。]
- (17) ただし, 後年の回顧によれば, この想定が完全に放棄されたのは1986年以後である。Quine[1999], p.75. 実際, 「命題の対象」の中でも, 依然として次のように言われている。「ことによれば, 観察文どうしの間主観的な刺激同義性という関係は, 刺激意味の同一性よりもむしろ, 刺激意味の類似性によって, そして最終的には神経末端の近似的な相同性によって再定義できるかもしれない」(Quine [1969b], p.159)。
- (18) こうした点についてクワインはあまり明確な発言を残していないが, Quine [2000b] には次のような一節がある。「私は, その適用可能性が実用に耐える程度に外部から観察可能である限りは, 心的な述語を許容している。結局のところ, 物理的な述語もまた, いろいろな度合いで漠然としており, そこにも私は同じ尺度で臨む。しかし…私は心的存在者は認めない。そして, 量子論理学の適用可能性のために私は外延主義を主張する」(p.410.)。
- (19) 先の「表層的同意」にしても, 純然たる物理現象に関わる概念として扱われているようには見えない。たとえば, 「表層的同意の中には誠実でないものもある」(Quine [1975a], p.91) といった言い方は, 表層的同意が, もっぱら行動的基準によって確認されるものではあれ, やはり心的な態度の表明だと考えなければ理解しがたい。
- (20) とりわけ Quine [1992a] の16節と24節。ただし Quine [2000b], p.410には「感情移入」に類する考え方がすでに論文「ふたつのドグマ」以前から取られていたとある。
- (21) Quine [1974], pp.16-20.
- (22) 「受容器的な類似性」とは, 「行動は無視した上で, たんに感官の表面への衝撃が物理的に類似しているということ」(Quine [1974], p.16) だとされ, さらに次のように言われる。「出来事 [=ある人の生涯の時間切片] が互いに受容器的に類似していると言えるのは, 一方の場面で触発されている感覚受容器すべてからなる集合が, 他方の場面で触発されている集合と, 近似する限りにおいてである」(Quine [1974], p.16. [ ]内は筆者)。
- (23) Cf. Quine [1974], pp.16-18.
- (24) 「知覚的類似性はつねにある個体の内部に制限されている」(Quine [1974], p.19)。同じことを, 後年のクワインは知覚的類似性の「私秘性」と呼ぶ。Cf. Quine [1995b], p.20.
- (25) このことは, 前節でも触れた行動主義についてのクワインの自己理解と関連している。
- (26) 『刺激から科学へ』ではそれが“salient”な受容器と呼ばれる (Quine [1995b], p.18)。
- (27) Cf. Quine[1974], p.23. これはクワインが傾性概念一般に対して取っていた見方である。Cf. Quine[1975a].
- (28) Quine[1996], p.162では, クワインが受容器的な相同性の仮定を最終的に放棄したのは80年代の半ば以後であったと述べられている。それはクワインがデイヴィッドソンの「無法則一元論」への賛同を口にするようになった時期と一致している。
- (29) Quine [1992a], p.2. [邦訳3頁]
- (30) Quine [1981a], p.25. [邦訳139頁]
- (31) Quine [1992a], p.4. fn.1.

(32) Quine [1992a], p.3. [邦訳5頁]

(33) 本稿では上記の定義に登場する「(言語) 共同体」概念にまつわる問題には立ち入らない。その問題については Davidson [1990], pp.70-71; Szubka [2000], p.9を参照。

(34) このことは、かつてクワインが愛用した「刺激意味」という用語の存在意義を否定するのに等しい。(実際、クワインは1995年にははっきりこの概念を「放棄する」と述べている。Quine [1995a], p.350.)。そのことはまた、クワインが言語学習や翻訳の場면을記述する際に、相手の立場に身を置いて自分ならばどんな文への同意を促されるかを想像する「感情移入 (empathy)」の役割を強調することと連動している。かつて「刺激意味」という概念が担っていた役割は、いまやはっきりと、共有された状況や感情移入に委ねられている。

(35) 「非法則論的一元論」については Davidson [1980], ch.11-12を参照のこと。

(36) さらに、Quine [1994] には観察文の「基準」と「定義」という区別も見られる。そこでの言い方では、観察文を同定・翻訳する際の「基準」を与えるのは被験者の行動(またその周囲の状況)だが、観察文の「定義」が述べるべきなのは、観察文への同意の「因果的本性」(Quine [1994], p.229) ——「翻訳の正しさとは物理的に見て何であるのか」(ibid. 斜体は原文に従う) ——なのだと言われる。この場合の「基準」と「定義」は、それぞれ、言語の公共性を踏まえた行動主義の関心と、自然化された認識論の関心とに対応している。

(37) ただし、細かい点での異同は残されている。Cf. Davidson [1994], p.192.

(38) Quine [1992a], p.41, 邦訳59頁。ただし、この箇所の邦訳には誤りがある。

(39) 他の点ではクワインに忠実な R・ギブソンも「発話の場面」という概念については疑義を呈している。Cf. Gibson [1994], p.93.

(40) もっとも、この時期のクワインは、いくつかの箇所で、遠位説を取ることが、被験者による物象化を無批判に容認することには直結しない旨の発言を行っている。その典型は、富田恭彦氏によるインタビューの中で次の発言である。

「…その気になれば、私もデイヴィドソンのように、ウサギから出発し、ウサギという言葉をつかって被験者の刺激過程について語ることができます。その場合にも、私は被験者がウサギを物象化したと想定する必要はありません。私は依然として被験者による漸進的な物象化を研究できるでしょう。」(富田[1994], p.39[訳文は本稿での用語法に合わせて改変した。原文は Quine [1992b] による。) Cf. Quine [1992a], p.42)。  
 とはいえ、この主張の論拠についてのクワインの説明は必ずしも明瞭でない。クワインの説明は、自然化された認識論者はあらゆる科学的知見を前提して差し支えないから、遠位的な対象にも自由に言及できる、という点に尽きている (Quine [1992a], p.41-42; 富田 [1994], p.39)。しかしこの論点は、それ自体としては正しいが、的を外している。集団にとっての観察文に関する先の修正案のポイントは、たんに遠位的対象を定義に持ち込むことではなく、それを被験者が「目撃」するものと想定している点にあった。その想定がなければ、「発話の場面」は各人の同意傾性を照合する場として機能しない。だが、被験者が遠位的な対象を目撃していることを認めながら、なおかつその被験者に物象化を帰属させないということがありうるのか。明瞭でないのはその点である。

(41) Quine [1995b], p.20では、知覚的類似性が「私秘的」だと言われる。そこでは受容器やその刺激過程も同様に「私秘的」とされる。Cf. Quine [1992a], p.44.

(42) cf. Quine [1996], p.160. 因みに、この場合の「尺度 standards」とは、我々の知覚判断が「準拠」する規則のことだが、その実質は知覚の際の物理的・生理的な過程に「見出される」規則性と解されている。

(43) クワインは、この種の一致が、少なくとも全面的には、人間間の相互行為の所産ではなく、むしろ相互行為が成り立つための前提に属すると考えている。言語行動は集団内での条件付けの所産だというのがクワインの年来の主張だが、その種の条件付けが成り立つためには、前提として、各人の知覚が一致していなければならない。そこでクワインは、知覚的類似性が相互行為の結果として変化する可能性は認めながらも、「知覚的類似性の一部は生得的でなければならない」(Quine [2000a], p.2) と述べている。

#### [文献]

- Barrett, R. and Gibson, R., eds. [1990]: *Perspectives on Quine*, Blackwell.
- Bergstroem, Lars. [1990]: “Quine on Underdetermination”, in Barrett and Gibson [1990], pp.38-52.
- Davidson, Donald. [1980]: *Essays on Actions and Events*, Oxford U.P. [服部裕幸, 柴田正良訳, 勁草書房, 1990年]
- Davidson, Donald. [1990]: “Meaning, Truth, and Evidence”, in Barrett and Gibson [1990], pp.68-79.
- Davidson, Donald. [1994]: “On Quine’s Philosophy”, in *Theoria* 60: 184-192.
- Davidson, Donald. [1999]: “Reply to W. V. Quine”, in Hahn [1999], pp.80-86.
- Follesdal, Dagfinn. [1995]: “In What Sense is Language Public?”, in Leonardi and Santambridio [1995], pp.53-67.
- 古田智久 [2000]: 「観察文をめぐる二つの観点」, 『精神科学』第38号, 77-112頁。
- Gibson, Roger F. [1994]: “Quine and Davidson: Two Naturalized Epistemologists”, in Preyer et al. [1994], pp.79-96.
- Guttenplan, Samuel., ed. [1975]: *Mind and Language*, Oxford U.P.
- Hahn, L.E. ed. [1999]: *The Philosophy of Donald Davidson*, Open Court.
- 清塚邦彦. [2000]: 「クワインの経験主義」『山形大学紀要(人文科学)』第14巻3号17-48頁
- 清塚邦彦. [2002]: 「近位説と遠位説: クワインの観察文理論に対するデイヴィッドソンの批判について」, 『科学哲学』第35巻, 第2号, 15-28頁
- Leonardi, P. and Santambridio, M., eds. [1995]: *On Quine: New Essays*, Cambridge U.P.
- Orenstein, Alex., ed. [2000]: *Knowledge, Language and Logic: Questions for Quine*, Kluwer Academic.
- Preyer, G. et al. eds. [1994]: *Language, Mind and Epistemology: On Donald Davidson’s Philosophy*, Kluwer Academic.
- Quine, W.V. [1948]: “On What There Is”, in Quine [1953], pp.1-19.
- Quine, W.V. [1951]: “Two Dogmas of Empiricism”, in Quine [1953], pp.20-46.
- Quine, W.V. [1953]: *From a Logical Point of View*, Harvard U.P. [飯田隆訳, 勁草書房, 1992年]
- Quine, W.V. [1952]: “On Mental Entities”, in Quine [1976], pp.221-227.
- Quine, W.V. [1954]: “Scope and Language of Science”, in Quine [1976], pp.228-245.
- Quine, W.V. [1955]: “Posits and Reality”, in Quine [1976], pp.246-254.
- Quine, W.V. [1960]: *Word and Object*, MIT Press. [大出晁, 宮館恵訳, 勁草書房, 1984年]
- Quine, W.V. [1969a]: “Epistemology Naturalized”, in Quine [1969], pp.69-90. [伊藤春樹訳, 『現代思

想』1988年7月，48-63頁]

- Quine, W.V. [1969b] : “Propositional Objects”, in Quine [1969], pp.139-160.
- Quine, W.V. [1969c] : *Ontological Relativity and Other Essays*, Columbia U.P.
- Quine, W.V. [1974] : *The Roots of Reference*, Open Court.
- Quine, W.V. [1975a] : “Mind and Verbal Disposition”, in Guttenplan [1975], pp.83-95.
- Quine, W.V. [1975b] : “The Nature of Natural Knowledge”, in Guttenplan [1975], pp.67-81.
- Quine, W.V. [1975c] : “On Empirically Equivalent Systems of the World”, *Erkenntnis* 9, 313-328.
- Quine, W.V. [1976] : *The Ways of Paradox and Other Essays*, revised and enlarged edition, Harvard U.P.
- Quine, W.V. [1977] : “Facts of the Matter”, in Shahan and Swoyer [1979], pp.155-170.
- Quine, W.V. [1981a] : “Empirical Content”, in Quine [1981b], pp.24-30. [森田茂行訳, 『現代思想』1988年7月号, 138-143頁]
- Quine, W.V. [1981b] : *Theories and Things*, Harvard U.P.
- Quine, W.V. [1984] : “Carnap’s Positivists Travail”, *Fundamenta Scientiae* 5 : 325-333.
- Quine, W.V. [1990a] : *Pursuit of Truth*, 1st ed., Harvard U.P.
- Quine, W.V. [1990b] : “Three Indeterminacies”, in Barrett and Gibson [1990], pp.1-16.
- Quine, W.V. [1990c] : “Comment on Davidson”, in Barrett and Gibson [1990], p.80.
- Quine, W.V. [1992a] : *Pursuit of Truth*, 2nd ed., Harvard U.P. [伊藤春樹, 清塚邦彦訳, 産業図書, 1999年]
- Quine, W.V. [1992b] : “Interview between W.V.Quine and Yasuhiko Tomida” at <http://sortes.hs.h.kyoto-u.ac.jp/quine.html> [邦訳は富田 [1994] に所収.]
- Quine, W.V. [1993] : “In Praise of Observation Sentences”, *Journal of Philosophy* 90 : 107-116. [富田恭彦訳, 『思想』861号 (1986年)]
- Quine, W.V. [1994] : “Exchange between Donald Davidson and W.V. Quine following Davidson’s Lecture”, *Theoria* 60 : 226-231.
- Quine, W.V. [1995a] : “Reactions”, in Leonardi and Santambridio [1995], pp.347-361.
- Quine, W.V. [1995b] : *From Stimulus to Science*, Harvard U.P.
- Quine, W.V. [1996] : “Progress on Two Fronts”, in *Journal of Philosophy* 93 : 159-163.
- Quine, W.V. [1999] : “Where Do We Disagree?” in Hahn [1999], pp.73-79.
- Quine, W.V. [2000a] : “I, You and It: Epistemological Triangle”, in Orenstein : 2000], pp.1-6.
- Quine, W.V. [2000b] : “Response to George”, in Orenstein [2000], pp.408-410.
- Shahan, R.W. and Swoyer, C. eds. [1979] : *Essays on the Philosophy of W.V.Quine*, University of Oklahoma Press.
- Szubka, Tadeus. [2000] : “Quine and Davidson on Perception”, in Orenstein [2000], pp.7-19.
- 富田恭彦 [1994] : 『クワインと現代アメリカ哲学』世界思想社

## W.V.Quine on the Definition of 'Observation Sentences'

KIYOZUKA, Kunihiro

The concept of 'observation sentences', which is first introduced in *Word and Object* (1960), has since been a key concept both in Quine's epistemology and in his theory of language. In his epistemology, this concept takes the place of that of subjective 'experiences'—the most basic epistemological notion in traditional empiricism—and paves the way for his physicalistic conception of empiricism. In his theory of language, our positive and negative reactions to observation sentences, checked behavioristically, are regarded to be all that matters in translation in general, banning the psychological as well as platonistic conceptions of 'meaning'.

Despite its importance, the definitions given by Quine to the concept of 'observation sentences' are rather unsettled. In this paper, I examine Quine's complicated efforts to characterize this concept. As I see it, Quine's efforts were driven by two kinds of concern. One is the stress on the social character of language. The other is the naturalization of epistemology. I shall follow somewhat historically the forms of the conflict between these two concerns in his writings, from *Word and Object* to the latest ones, and determine the final form that Quine settled for.